

軍師・参謀を志す人のために

Vol.26

シン・ゴジラ

プロジェクトチーム

— 巨災対が直面する課題 —

プロジェクトチーム

巨災対が直面する課題

プロジェクトチーム巨災対	5
巨災対が直面する課題	13
臨時性ゆえの不明確な権限	24
多忙を極めるプロジェクトリーダー	35
プロジェクトチームを設立する立場なら	41
プロジェクトチームが解散するとき	51

現代の「軍師・参謀」と呼ばれる人々は、各界において、指導者（リーダー）の活躍やその目標とするところへの到達を、「知恵」によって支えています。

この小冊子は、将来このような「軍師・参謀」的な役割を務めたいという志を持つ若いかがたのために、その志の実現に向けた一つの足がかりを提供できないかと考えて制作しました。

この小冊子が、将来の「軍師・参謀」たらんことをめざすかがたにとって、『手引書』のような感じで気楽に読んでいただけるものとなれば幸いです。

プロジェクトチーム きよさいたい 巨災対

◆ 映画「シン・ゴジラ」を見た興奮

映画「シン・ゴジラ」は、2016年（平成28年）7月に公開されました。そしてこの小冊子が新刊として刊行されるコミックマーケット93（2017年12月開催）を前にした11月12日には、早くも地上波（テレビ朝日系）で放送されるに至りました。この小冊子の制作者も、またあらためてこの映画を見たとき、映画館で見たあの興奮が鮮烈に蘇ってきたものです。

この映画については、公開されたとたんに、本当にたくさんの人たちが様々な視点から、幾多のたいへん奥深い論評を行い、議論を展開しておられました。そのような状況の中で、この小冊子の制作者も、ネット上に掲げられたさまざまな評論を徘徊し、また、数々の刊行物を街の書店やアマゾンで買い求め、そしてコミックマーケットで「シン・ゴジラ」関係の同人誌を漁り歩いた一人です。

◆ 「軍師・参謀」の役割を考える素材として

この小冊子の制作者は、映画館での初見（1回目）の興奮がやや落ち着き、2回目に見たときには、この映画の中で、ゴジラへの対策について専従で調査・検討を行う班（チーム）やそのスタッフたちのことが、いっそう興味深く感じられるようになりました。とりわけ興味深く思ったのは、次のような点でした。

- ・ゴジラ調査班（きよさいたい巨災対*1）の活動に制約要因はなかったのか？
- ・その制約要因は巨災対スタッフたちにどのように影響したか？
- ・巨災対スタッフらは、その制約要因をいかに突破したのか？
- ・巨災対の事務局長は、リーダーとしてどう動いていたのか？
- ・巨災対を設立する立場の人たちにとっての注意点は？
- ・巨災対が解散する時、スタッフたちは何をすべきなのか？

そしてこれらは、この小冊子の制作者自身の経験や見聞、さらには、当サークルメンバーたちとの間での議論の内容とも重ね合わせることで、当サークルがこれまで小冊子シリーズの中で続けてきた

*1：「巨大不明生物特設災害対策本部」（後述参照）。

「軍師・参謀」としての役割を考える上での、けっこう面白い素材となり得るのではないかと思えたのです。

この小冊子（第26巻）では、上に掲げたような点を心に留めながら、私が読者の皆さんとともにこの映画の登場人物になったのだと妄想することを通じて、「軍師・参謀」的な役割を実践していくための「策」の勘どころといったものを検討してみたいと思います。

なお、本巻の執筆に当たっては、映画「シン・ゴジラ」をご覧になっていないかたがたにとっても、できるだけ分かり易い記述となるよう心がけました。

◆ 巨災対を中心とした「シン・ゴジラ」のあらすじ

ここで、念のため映画「シン・ゴジラ」のあらすじを、「巨大不明生物特設災害対策本部」（巨災対）の動きを中心に、簡単に掲げておきます。既に「シン・ゴジラ」をご覧になっておりそのストーリーに詳しい方は、この項を飛ばして、次項へと読み進んでください。

「シン・ゴジラ」のストーリーは、おおよそ、以下のように展開しました。

○巨大不明生物の出現

- ・羽田空港沖の海中から、突如、高温の水蒸気が噴出。さらに、東京湾アクアラインの海底トンネルでも天井の崩落による浸水が生じるなど、東京湾で異常な事態が続発。
- ・政府による異常事態への対応が混乱する中、海中から巨大な生物の「しっぽ」と思われる部位が現れ、空に向かって長く伸びている姿が映像として捕捉。しかし、それはすぐに海中に没してしまい、巨大な生物の正体は不明のまま、日本政府の総理大臣や閣僚、官僚たちは、対処に困惑。
- ・この「巨大不明生物」は、その後、東京湾の海底から多摩川河口方面に移動し、ついに大田区蒲田に上陸。上陸した巨大不明生物の移動に伴い、家屋、車両をはじめとした被害は品川区方面へと拡大。避難する住民らの混乱も広がる中、総理大臣により自衛隊の防衛出動が決断。
- ・一方、巨大不明生物は、それまでの這うような歩行方法から、立ち上がった二足歩行へと急速にその形態を変化。

- ・巨大不明生物による被害のさらなる拡大が危惧される中、陸上自衛隊木更津駐屯地の対戦車ヘリコプター隊に対し、出動が下命。ヘリ部隊は上空から巨大不明生物に向けての射撃の準備を整え、攻撃開始の指示を待つも、逃げ遅れたとみられる住民の姿が確認されたことにより、作戦は中止。巨大不明生物は、再び東京湾に戻り、深く潜行。

○巨災対の設置

- ・海上自衛隊による懸命の搜索にもかかわらず、巨大不明生物の所在が確認できない状況のもと、自衛隊は再上陸に備えた作戦を検討。また、総理大臣官邸内には、この巨大不明生物に関する専従調査班「巨大不明生物特設災害対策本部」が設置。この対策本部（「巨災対」）の事務局長（巨災対に詰めて調査や対処方法を検討する実務者たちの、リーダー役）に、国会議員であり内閣官房副長官を務める矢口蘭堂^{やぐちらんどう}が就任。
- ・矢口副長官の下には政府各省や大学から、個性豊かな（あるいは、アクの強いとも言える）人材たちが集まり、矢口のリーダーシップのもとで巨災対のスタッフとして、巨大不明生物の正体調査と対策について、それぞれが所属している官庁などの組織の枠にとらわれない自由な議論と検討を開始。巨災対スタッフからは寝食を忘れ精力的に活動。そのような中、あるスタッフからは、これまでの生物学の常識を越えた巨大不明生物の活動には核エネルギーが用いられているのではないかとの意見が出るが、他のメンバーからは一笑に付され即座に否定。
- ・しかし、都区内で微量ながら放射線が検出され、観測された線量の強度分布と巨大不明生物が移動したルートとが一致。
- ・米国から緊急来日した大統領特使により、巨大不明生物と核物質との関連についての機密情報が巨災対チームにもたらされ、特使からはさらに、巨大不明生物に関する研究を行っていた科学者が行方不明となった際に遺した、構造レイヤー^{のこ}の解析表とおぼしき資料も提示。しかし、巨災対スタッフたちもこの資料の意味が解せず、謎はいつそう深化。他方、米国から提供された情報をもとに、日本政府は、巨大不明生物の名称について、「ゴ

ジラ」と呼称することを決定。

- ・巨災対のスタッフたちは、ゴジラの行動などからその体内には原子炉のような機構が存在していると推定し、この機構の冷却機能を阻害すればゴジラ自身の活動も停止させられるものと判断。この判断をもとに、ゴジラ体内での「原子炉」の冷却システムを担っている血流を止め、ゴジラの体内反応炉を緊急停止状態に陥らせることで、ゴジラを「凍結」させてその活動を停止させる手段が考えられるとして、ゴジラに血液凝固剤を経口投与するという対策を立案。

○熱焰流

- ・その頃、さらに巨大に成長したゴジラは、今度は鎌倉の海岸から上陸し、東京方面に向けて移動を開始。
- ・自衛隊では、ゴジラの東京侵入を防ぐため、多摩川を防衛線としてヘリコプターからの誘導弾や戦車からの砲撃、長距離ロケット、さらには航空自衛隊戦闘機によるミサイル攻撃といった作戦を展開するが、ゴジラには全く通用せず、ゴジラはついに世田谷区との境から都内へと侵入、目黒区にまで到達。
- ・こうした事態の展開を見ていた米国は、在日米国大使館の防衛を名目として米軍によるゴジラへの爆撃を実施。米軍機から放たれた地中貫通型爆弾は、ゴジラに命中してその体内に貫入し爆発。
- ・大型爆弾による攻撃を受けてゴジラは大きく咆哮し、いったんは動きを停止するものの、すぐに口から超高熱の熱焰流を放出しはじめ、一帯を焼尽。口からの熱焰流はやがて強く輝く細い熱線へと収束変化し、さらに、ゴジラは背中中のヒレのような部分からも同様の熱線を放出。これらの熱線により米軍機は破砕され、首相官邸から政府首脳らを乗せて飛び立とうとしていた自衛隊ヘリも熱線の直撃を受け爆発。夜の闇に、港区や中央区、千代田区一帯が地獄の業火と紅蓮の炎に包まれている様子が浮かび上がり、その中を、熱線の放出を止めたゴジラは、体内のエネルギーが枯渇したかのように立ったまま活動を休止。

○立川へ

- ・日本政府の中核施設があった地域一帯は甚大な被害を受け、このため、首相官邸機能は、首都圏での非常事態を想定し臨時拠点として立川市内に整備されていた広域防災基地内の、立川災害対策本部予備施設へと移管。総理大臣をはじめ閣僚らが行方不明となるという事態を受け、総理大臣臨時代理が就任。
- ・立川になんとかたどり着いた矢口副長官は、ゴジラ対策の実質的な責任者として、内閣府特命担当大臣・巨大不明生物統合対策本部副本部長*2 を拝命。矢口副本部長は、ゴジラによる東京中心部の壊滅的な惨状に激しく心を痛めながらも、やはり多くの犠牲が出た巨災対スタッフの生き残りメンバーたちとともに、あらためて「ゴジラ凍結」のプラン実現に向けて、献身的な活動を再開。
- ・ゴジラの血液を凝固させる薬剤を複数候補の中から絞り込むために、矢口は国家機密ともいえる、採集されたゴジラの細胞片を、分析可能な施設を有する諸機関へ広く提供するとの決断。
- ・ゴジラに対して効果があるとして絞り込まれた血液凝固剤を、大至急で大量生産し、さらに、それを輸送してゴジラへ経口注入するための、化学プラントやタンク車、高圧ポンプ車といったものの手配、調達に向けて、巨災対スタッフらはそれぞれ各方面への協力要請、連絡調整などの活動に大奮闘。内外の諸機関、民間会社等の協力を得て、対ゴジラ作戦の準備はフル回転で進行。

○ゴジラ凍結作戦

- ・しかし国連多国籍軍により、現在休眠して動きを止めているゴジラが活動を再開するレベルにエネルギーを蓄積するまで、あと360時間（15日間）と推計。さらに、ゴジラが再び活動を開始した時に、ゴジラ、つまりそれが存在している東京へ、多国籍軍の戦略原潜による弾道弾でもって熱核攻撃を行うこととなり、その場合には犠牲が生じることもやむを得ないとの決定が国連安保理により成立。日本政府もその決定をやむなく承認。

* 2：本部長は、内閣総理大臣（臨時代理）ではないかと思われます。

核攻撃実施へのカウントダウンがスタート。

- ・首都圏から360万人にのぼる人々の避難が始まり、不安と混乱の中を全国への分散疎開が展開。東京消滅までの残された短い時間を思い、総理大臣臨時代理は、「避難とは、住民に生活を根こそぎ捨てさせることである」と慨嘆。
- ・ゴジラを東京もろともに滅却させてしまう、多国籍軍による核攻撃実行の時刻が迫る中、巨災対により提示されたゴジラ凍結のための作戦が、周囲の制止を振り切りみずから立川を離れ、千代田区に置かれた最前線へと赴いた矢口による総指揮のもと、ついに開始された……。

◆ 巨災対は「プロジェクトチーム」

ここであらためて、この映画に登場する「巨災対」の役割や構成を思い出してみます。

すると、この調査班が設けられた経緯とも合わせて考えれば、巨災対はいわゆる「プロジェクトチーム」として、典型的な例であることが再確認できます。

プロジェクトチームとは、広辞苑には「特定の任務を遂行するために編成したグループ」であると示されています。さらに他の辞書や、専門書などの情報も併せてまとめてみると、プロジェクトチームという小集団の性質あるいは特徴は、次のように整理できると思われれます。

- ・ある（一回限りの）特定の目的を達成するために、組織内で臨時に編成されたものである
- ・目的の実現に向けて、適任と考えられる人材が組織内で選抜される
- ・この選抜対象者らは、現在所属している組織（部署等）から一時的に移る形で、チームのメンバーとなることも多い
- ・メンバーの選抜は、単なる職務上の地位や過去の経歴をもとにして行われるのではなく、発揮される能力や技術力などをもとにして、目的達成のために必要にして十分な構成となるように実施されるのが基本
- ・目的の実現のために、メンバーらを統率する強力なリーダーシッ

ブが存在

- ・チームの活動終了後には、チームが挙げた成果が組織内に分配されてチームは解散となり、個々の構成メンバーらは選抜される前の（元の）所属先へと復帰する

◆ プロジェクトチームによる活動のシミュレーションとして

「シン・ゴジラ」の「巨災対」は、ゴジラの正体を調査し対応策を検討するという目的のために、首相官邸の二階会議室内に臨時に設けられ、各官庁などからこの目的達成に適した人材が選抜され派遣されてきました。官房副長官である矢口事務局長に率いられたこの「巨災対」はまさに、前章で掲げたとおりの「プロジェクトチーム」としての特徴を備えています。

このため「シン・ゴジラ」という映画は、プロジェクトチーム「巨災対」の活動に関しての一種のシミュレーション、あるいは再現ドキュメンタリーとして鑑賞しても、非常に楽しめる魅力的な作品だったように思われます。

他方、この小冊子の制作者をはじめとした当サークルのメンバーたちは、この作品のストーリーの魅力に強く惹きつけられつつも、自分たちの経験からしてみると、プロジェクトチーム「巨災対」の活動はある意味で「夢」のようなものではないのかな、とも感じられたのです。

では、いったいなぜ巨災対の活動が「夢」のように感じられたのでしょうか。それは、巨災対がプロジェクトチームであることから生じるはずの、チームやそのスタッフたちが直面するであろう課題が、全てあらかじめ解決済みとなっているシミュレーションであり、それゆえ巨災対のスタッフ全員がプロジェクトチームの目的達成のために、理想的な形で活動に集中できていたように見えたからです。

しかし現実の世界では、プロジェクトチーム、少なくともこの小冊子の制作者たちがかつて、それぞれ参加した経験のあるいくつものプロジェクトチームでは、そのメンバーたちはプロジェクトチームであることから生じるいくつかの課題に悩まされ、あるいはそれに足を引っ張られて、なかなか巨災対スタッフのようにプロジェ

クト活動のみに全力を集中しきれないということが、多かったものです。

◆ プロジェクトチームのメンバーが抱える課題とは

ここで勝手な妄想をお許しただけなら、上記の「夢」のように感じられたのは単に、スクリーン上ではそうした部分のみが取り上げられていた結果なのであって、実際には巨災対のスタッフたちもやはり、プロジェクトチームであることから生じるいくつかの課題に悩まされていたのです。そして彼らは、ゴジラ対策の検討という多忙な状況であるにもかかわらず、巨災対が一つの「プロジェクトチーム」であるがゆえに直面しているさまざまな課題を解決するために、自身の時間を割き、みずからその解決に非常な努力をしていたのであろうと考えられるのです。

プロジェクトチーム「巨災対」で活動する者たちが直面したであろうこの課題は、もちろん、先に掲げたようなプロジェクトチームが有する性質あるいは特徴から生じてくるものです。

本巻では、プロジェクトチームが持つ性質・特徴と、それらを原因として生み出されてプロジェクトチームのメンバーたちを悩ませる課題について、この小冊子の制作者や同じサークルのメンバーたちによる経験も踏まえて、主なもの2つを挙げて検討してみたいと思います。おそらくこれらは、将来「軍師・参謀」的な役割を果たすことになる読者の皆さんが、策の一環として何かのプロジェクトチームを設立するに当たり、その良好な運営のために向き合わなければならないものでもあると考えられます。

次章では、プロジェクトチーム「巨災対」とそのスタッフが直面したであろう課題について、シン・ゴジラのストーリーを思い浮かべつつ、考えてみることにします。

巨災対が直面する課題

◆「二重の所属」状態となるメンバーたち

「プロジェクトチームの特徴から生じる課題」としてこの小冊子の制作者らが重視しているものの一つ目は、プロジェクトチームのメンバーたちが、自分たちの属する「2つの組織」それぞれから果たすよう求められる役割の負担に、苦しめられる可能性があるということです。

プロジェクトチームは、何か特別な事態の発生を受けて大急ぎで設立される場合があります。そしてこのように設立されたプロジェクトチームのメンバーもまた、組織（会社や政府）の中から急きょ選抜されて集められることになりがちです。そうしたメンバーの選抜に際して、各メンバーと彼らが現在所属している既存の事務機構（部や課など）との間の関係性を、きちんと整理（切り離し）しておかなければ、プロジェクトチームの個々のメンバーにしてみれば、自分がいわば「2つの組織」、すなわち、本来の籍（あるいは、席）がある職場（部や課など）と新たに設立されたプロジェクトチームとの、いわば「両方に属している」状態に置かれたようなものになってしまうおそれがあります。

巨災対は、ゴジラによる最初の上陸と被害の発生という緊迫した事態の中で緊急に設立されたものでした。そしてこのような巨災対に集められたスタッフたちもまた、勤務していた（所属していた）組織、つまり各官庁などから出向という形で、首相官邸（内閣官房）に急きょ送られてきたものようです。映画の字幕を見ると、巨災対のスタッフたちはそれぞれ、たとえば次のように、もともと所属している組織名での肩書が示されています。

- ・森 文哉＝厚生労働省 医政局 研究開発振興課長
- ・安田 龍彦＝文部科学省 研究振興局 基礎研究振興課長
- ・尾頭 ヒロミ＝環境省 自然環境局 野生生物課 課長補佐

このように彼らは、きちんと手続きを踏んだ上で首相官邸（内閣官房）の職員へと完全に移籍して矢口副長官のもとに来たわけでは、

なさそうなのです。

しかし、彼らはそれぞれの出身官庁からの、単なる連絡係として首相官邸内に詰めているわけでもありませんでした。彼らは巨災対の中で、自分たちの出身官庁に対していちいち連絡・相談や報告などすることもなく結構身軽に、自身の考えでもって業務を進めています。

どうやら巨災対スタッフらは、それぞれが所属している各官庁で、あるひとつの役職についている状態のまま、同時に巨災対のスタッフにもなってその巨災対の業務を担っていたように思われます。

◆ 二重の役割の負担が生じる

このような状況の時、これら巨災対のスタッフたちは、巨災対と自分が向出してくる前に所属していた元の官庁とで、いわば「両属」の状態になります。両属状態に置かれたプロジェクトチームのメンバーたちが、チームで新たに求められることになった役割と、組織のルール上では自分がまだ所属したままとなっている元の組織（事務機構）で果たしていた役割とを、二重に（並行して）果たすよう求められるといった場面が生じる事態は、容易に想像できます。

ところが映画の中では、森課長や安田課長たちがこの「二重の役割の負担」に苦勞している姿は描かれていません。映画では、巨災対は「専従」の調査チームであるとされていましたので、もしかしたら彼らは何か特別な措置により、それぞれの出身官庁で担っていた役割にまつわる負担や束縛など何もなく、全く自由な立場で、巨災対の業務だけに集中して当たることができたのかもしれませんが。

しかし、現実の会社や官庁組織では、この想像のような状態が成立することは、滅多にないように思われます。少なくとも、この小冊子の制作者やサークルメンバーたちは、それぞれプロジェクトチームに参加するに当たって、今想像してみた森課長や安田課長らのように、出身の組織（もともと所属していた部や課など）で負っていた役割から完全に解放されるという経験は皆無です。逆に、プロジェクトの業務中に自分たちが今まで所属していた組織からも何らかの問い合わせや指示が降りてきたり、自分が送り込まれたプロジェクトの状況報告を元の組織の方にも入れないでいると催促を受け

たりしたものです。「両属」の状態のもとでは、プロジェクトチームに加わる前に属していた組織による目に見えない束縛が必ず生じるものだ、というのがこの小冊子の制作者たちの実感です。それゆえ、この小冊子の制作者らとしては、映画の中の巨災対スタッフらの状況が、組織の中で働く職業人としては「夢」のように思えたのです。

この項で掲げた課題については、章をあらためて詳しく検討していくことにします。

◆ 組織の臨時性に起因して

この小冊子の制作者が、プロジェクトチームが持つ課題の二つ目として掲げておきたいのが、プロジェクトチームの権限があいまいで、このため他の組織・部署などからの協力が得にくいというものです。

この二つ目の課題は、プロジェクトチームというものが、既存の組織・事務機構を運営統治する指揮の系統とは別枠で（つまり、組織の指揮系統の中で、そのプロジェクトチームがきちんと位置づけられたものとしてではなく）、とりあえず、臨時的に設立される場合が多いということに起因して発生します。

もしも臨時に急いで設立されたプロジェクトチームから組織内の各部署等に対して指示や命令ができる権限について、あいまいな部分が残されていると、プロジェクトチームが具体的な活動を開始したとたん、組織内で成立している既存の秩序との間で大きな揉め事もめごとが生じてしまうことでしょう。

特に、プロジェクトチームが、何か緊急事態が起きたときに組織のトップらの意向を受けて急きょ設立され、その事態が解決・収束すると解散してしまうことがはっきりしている場合には、この臨時性に起因した課題は、より鮮明となります。

◆ 各官庁に対する巨災対の権限はどのようなであったのか

「シン・ゴジラ」で言えば、上述のように巨災対は緊急事態のもとに大急ぎで設立されたものです。映画を見る限り、この巨災対の設置は、各省の既存の権限や各省が行っている業務との関係を、十分に議論し整理したうえで行われたとは思えません。

このため、巨災対はゴジラのことを調査し対策を検討するという目

的で設立されたプロジェクトチームではありましたが、しかし自分たち自身でゴジラに関するデータを収集する手段、たとえば調査の実働部隊などを用意してもらえたわけではありませんでした。このような巨災対がゴジラに関する調査を進めるに当たっては、各官庁がそれぞれの組織の業務を通じて収集したデータを、巨災対にも提供してもらうことが前提となっていたようです。

しかし、巨災対が自分たちの調査や検討を進めるために必要だと考える諸データを、各官庁に対して（強制的に）提出させるための権限は、はたしてその巨災対（特に、首相官邸内で集中して作業を行っていた時期）に明示的に与えられていたのでしょうか。

日本政府という大きな組織の中で、その組織内のとある一つの小集団（巨災対）が、法令その他のルールに示された明確な権限もなしに、組織内の他の事務機構（各省など）に対して何か指示や命令をしようとしても、たちまち大きな壁におち当たってしまうことでしょう。たとえ巨災対が、強制する権限もないまま各省に対してゴジラ関連の情報を提供するよう求めたとしても、なんだかんだ理由をつけて体よくかわされてしまうか、あるいは、差し障りのない程度の内容のものが提出されてお茶を濁されるくらいがオチで、全面的な協力が得られるとは思えません。ゴジラに関する機密レベルの高い情報は、各官庁にとってはゴジラ対策に絡んだ施策推進のため、さらにはそれを通じて自身の権限を強化するために、独占しておくべき重要なアイテムだからです。

◆ 巨災対からの指示への対応ではなく

映画の中では、巨災対が原子力規制庁の根岸監視情報課長から、東京都内各地の放射線モニター空間線量が上昇しているとの情報を得られた場面がありました。ところがこの情報提供は、巨災対からの実務的な要請（もしくは指示）に応えたのではなく、また、同じ政府の官僚どうしである巨災対スタッフと規制庁の職員との間での協議のやりとりの中で伝えられたのでもありませんでした。巨災対がこの情報を得られたのは、（官僚組織の枠を超えた）政治家である矢口内閣官房副長官からの電話による問い合わせに、根岸課長が答えることを通じてだということが、示唆的なのではないかとこの

小冊子の制作者は感じています。

この矢口副長官との電話シーンでは、根岸課長は自分のデスクではなく、部屋の壁の方まで受話器のコードを延ばしながら、小声で状況を説明していました。これは、上記の情報提供が、巨災対からその権限に基づく要請や指示があったことへの原子力規制庁という組織としての正式な対応なのではなく、根岸課長から自分の知己である矢口副長官への個人的な厚意に基づく行為であったことを示しているように思われます。

ここまで述べてきた二つ目の課題についても、のちほど別な章にて検討を行います。

◆ この小冊子で検討すること（あるいは妄想すること）

次の章からは、この小冊子の制作者やサークルメンバーたちによる、プロジェクトチームに関する経験や見聞の事例をもとにしつつ、読者の皆さんとともに自分が巨災対スタッフの一員となった、つまり、尾頭や安田、森、そして矢口といった人たちを間近に観察できる立場にいたものと妄想して、上で掲げたような「プロジェクトチームが直面する課題」とその対応の策について検討していきたいと思えます。